

## 「ミロのヴィーナス」をどう教えるか

北 川 透

### 一 なぜ、「ミロのヴィーナス」なのか

最初にお断りしておけば、この小論は本年(二〇〇六)八月八日に梅光学院大学で開催された高大連携国語教育研究会で、わたしが口頭で発表したものに、補筆・修正しながら文章化したものである。

今回の研究会で、わたしに与えられたテーマは、高校の国語教科書に掲載されている「評論文」をどう教えるか、というのであった。「評論文」と言っても、さまざまな性格のものがある。一般的なレベルで問題を立てても、高校の先生方にはたいして意味がないだろう、と思った。それでもとにかく具体的な一篇の「評論文」を取り出し、教材研究を基本にしなが、実際の教科書でどう扱われ、現実に教える際に、いかなる問題が発生し、どんなことに注意したらよいかを考えてみたい、と思った。

その対象として、清岡卓行の「ミロのヴィーナス」を取り上げ

たのは、これが多くの教科書に採用されているエッセイだ、ということを知ったからである。わたしは限られた範囲に当たっただけであるが、それでも五社の教科書で採用されていた。あくまでわたしの見た範囲でしかないが、評論文の分野でこれだけ同じ教材が使われている例は他にはなかった。しかも、一字一句違う文章に、教科書によっては異なる題名が付されていることも気になった。

まず、掲載教科書名と文章の題名を掲げておきたい。

- ① 二〇〇六年度版三省堂『現代文』↓「ミロのヴィーナス」
- ② 二〇〇六年度版東京書籍『精選現代文』↓「ミロのヴィーナス」
- ③ 二〇〇六年度版筑摩書房『精選国語総合(現代文編)』↓「失われた両腕」
- ④ 二〇〇五年度版大修館書店『現代文1』↓「ミロのヴィーナス」

⑤ 二〇〇六年度版第一学習社『現代文』↓「手の変幻」

なぜ、教科書によって題名が異なるのか。その種明かし？ をすれば、これが収録されている評論集の名前が『手の変幻』であり、エッセイの名前が「失われた両腕」であり、サブタイトルが「ミロのヴィーナス」であるところから、それぞれの題名を引いてきているのである。常識で言えば、筑摩書房のように原題と同じ「失われた両腕」とすべきであろう。題名で内容を示唆したければ、副題として「ミロのヴィーナス」を添えればいいはずだ。第一学習社のように、評論集全体の性格を現している『手の変幻』という題名を、個別のエッセイに付けるのは、編集の判断として理由がないし、内容にそぐわないという点で間違っている、と思う。「ミロのヴィーナス」とした教科書も作者紹介のところか、後註で原題と異なることを示すべきであろう。この場合、題名によって、作者はエッセイの素材ではなく、主題を暗示しようとしているわけだから、それを註で示すことなく変更するのは安易である。そう思いながら、わたしがここでは「ミロのヴィーナス」の題名を使うのは、それが多くの教科書で採用されているのと、いちおう便宜的に三省堂版の教科書を主たるテキストにした、と思っっているからだ。

二 教材についての前提

清岡卓行の評論集『手の変幻』は、美術出版社から一九六六年

六月三十日に刊行された。清岡は一九五九年、シュールレアリスムの技法を定着させた最初の詩集『氷った焰』（書肆ユリイカ）で、戦後の現代詩に大きな衝撃と、影響を与えた詩人である。彼は後（一九七〇年）に「アカシヤの大連」で芥川賞を受賞し、小説家として広く知られる存在になる。しかし、詩人としても全詩集や文庫版のそれを除いて、十六冊ほどの詩集で大きな仕事を残したし、最後まで詩作も手放さなかった。そのことを過去形で述べるのは、清岡卓行は本年（二〇〇六年）六月三日になくなったからである。この詩人、小説家の紹介については、どの教科書もありきたりで、短さの問題ではなく、テキストとの関連をもたせた業績の特徴をうまく伝えていない。

今後参考にするのできるものとして、「現代詩手帖」（二〇〇六年七月号）の追悼特集がある。たとえば、ここに収録されているいくつかの追悼文のうち、詩人・中村稔の「戦後詩に新風を吹き込む」（『朝日新聞』六月七日夕刊の追悼文と同じ）の、次のような視点がこの教材を扱う場合も大事だ、と思う。

清岡卓行は終始小説家であるよりは詩人だと私は考えてきた。前記した諸著作（『アカシヤの大連』、『詩礼伝家』、『海の瞳』等）も、私には小説というより詩的散文のように思われる。つまり、これらの作品が私たちの心をうつのは、小説としてのストーリーの展開、絡みあう人物の造型によるというよりも、描かれた人

物に寄せる作者の詩心の篤さ、高貴さによっているといつてよ  
いだろう。(戦後詩に新風を吹き込む)

この面から「ミロのヴィーナス」が、一般的には「評論文」に  
属するとしても、詩人のいわば詩的随想ではないか、と疑ってい  
いはずである。しかし、どの教科書も、詩人の書いたテキストの  
表現性、文体の特質に注意していない。

更によれば、詩人の書いた詩的随想であるとしても、なお、そ  
れに止まる性格のものではないだろう。評論集『手の変幻』はこ  
の詩人が、美術、音楽などの分野でも、深い造詣と広い知識や理  
解をもって示されている。とりあえず「あとがき」を  
手がかりにして、その性格を言えば、《人間の手の表情を、美術、  
音楽、映画、写真などの世界を気ままに散歩し》たり、《楽しい  
旅行》をするスタイルや気分で書いた文章、ということになるだ  
ろう。広隆寺の半跏思惟像についての自作の詩もあれば、萩原朔  
太郎の詩「この手に限るよ」についての考察、東京オリンピック  
についての随想もある。それらはいずれも《手》を巡ったもの  
だ。中でも特に美術を対象にしたエッセイが多く、ドラクロワ、  
コロ、シャガール、ピカソ、ボッティチェリ、レンブラント、  
岸田劉生など東西の二十人以上の画家が取り上げられている。そ  
れらの絵や彫刻、写真などの図版も、実に七十二枚収録されてい  
る。それらのすべてにおいて、画家などが描いている人物像のな

かの部分である《手の表情》が、《その人間の全体とどのようにか  
かわるか》が問われているのである。つまり、単なる美術評論  
というのではなく、《手》とか《腕》とかに向けての美の視線が、  
全体としての人間存在への問いや想像となる、そんな《気まま  
な《楽しい旅行》のような随想がここには収められている。「失  
われた両腕」||「ミロのヴィーナス」とは、こうした性格を持っ  
た評論集のなかの巻頭を飾る一篇なのである。

### 三 学習についての基礎作業

教える側は、一篇の教材を通して何を教えるのか、ひいてはそ  
れは高校生のどういう能力を育てることに通ずるのか、という問  
いを欠かさずわけにはいかない。言うまでもなく、教科書の編集も  
そうした課題を前提にしている。単に、テキストの主題を読み取  
ればよい、というものではないだろう。

そうするとそこに学習の基礎作業という範囲があることに注意  
しないわけにはいかない。それは必ずしも、授業時間の最初にす  
べきことを意味しない。全体を通して、こうした基礎的な漢字や  
語彙能力、文章表現の能力を身につける作業があるだろう、とい  
うことだ。まず、①朗読あるいは黙読の作業。できたら、句読点  
の休止や、声の大きさなど発声に自覚的な朗読をさせたい。人前  
で発表する朗読自体に興味があることは、言うまでもないが、他  
にもそこで学習者のテキストに対する集中力を高められるし、ど

ういう漢字でつまずくのか、どういう表現で滞るのかによって、生徒たちの理解度を推し量ることもできる。②このテキストには難易度に幅のある適度な数の漢字が使われていて、漢字の読み・書きの練習にもふさわしいだろう。どの教科書も漢字を抜き出したり、そこに設問を設けたりしている。③また、語句あるいは熟語の意味、同音異語、同義語/対義語、四字熟語、慣用句などのどれかを調べさせたり、註をつけたりしている。たとえば《制作・製作》《原型・原形》《呈示・提示》《意味・意義》の違いや《偶然・客観的・正当・否認・具象》などのそれぞれの熟語について対義語をたずねるなど。ただ、ことは学習はすべてというわけではないが、できるだけ、孤立的ではなく文章全体との関連や前後の文脈の中で取り上げないと、学習が形式化したり、学習者の意欲を殺いだりすることになるだろう。

文脈の中で語を考えるということで、二つの例をあげたい。その一つは、たとえばこのエッセイには《変幻自在》と《千変万化》の二つの《四字熟語》が出てくる。そこで教科書の手引きでは、これと同じ《四字熟語》を集めさせたり、《千》と《万》というように、二つの数字の入った《四字熟語》を考えさせたりしている。そのこと自体は、漢字能力を高める学習になるだろう。しかし、本文全体の関係で言うと、他にも漢字四字が列なった《美術作品》、《十九世紀》、《両腕以外》が出てくるのに、これを教科書が《四字熟語》として扱わないのはなぜだろう。これら

が《四字熟語》でないなら、その基準は何か。明確な答えはないにしても、《四字熟語》の中には、一つの意味を表すように合成されたものと、ただ二語の熟語が結合されただけのものがあることを考えるのは、ことばの差異に敏感になる上で意味があるだろう。

もう一つは《変幻自在》や《千変万化》が、《四字熟語》であろうとなかろうと、この文章の主題と深く関わっていることへの注意である。この二つの熟語は、三つのパートからなっている、この文章の最後の一番短い部分に出てくる。つまり、作者がそれまでに述べてきたことのまとめのところで使われている。前後を引くと、《生命の変幻自在な輝き》、《それ（手というもの）は、世界との、他人との、あるいは自己との、千変万化する交渉の手段である》（カッコ内は北川）ということになる。一つとも意味はよく似ている。生命的なもの、あるいは関係的なものを、固定的に捉えず、現れたり消えたり、さまざまに変化するものとしてみる、作者の思考がここにも映し出されているのである。

ことばに註をつけるに際しても、全体あるいは前後の文脈との関連が大事だろう。三省堂版では、《パロス》や《メロス島》には註が付いているが、《ルーヴル美術館》にはそれが無い。なぜ、古代ギリシアの彫刻が、パリのルーヴルにあるか、ということを考えている上で、これには註が欲しいところだ。やはり、同じく三省堂版では、外来語の《グロテスク》に《奇怪な。異様な。》

そして《アイロニー》に《皮肉》という註解がある（フランス語や英語の原語表記を省略する）。しかし、こうした単なる語の辞書的解釈でいいのだろうか。

まず、前者では《すべて興ざめたもの、滑稽でグロテスクなものに思われ》という文脈である。これは後でも触れるが、作者は大げさな言い方、つまり、誇張法で語っている。そうするとこの註解の意味では弱いのではないか。むしろ、無気味な、醜悪などという意味合いが加わった註釈か、それとも誇張していること、あるいはなぜ作者は誇張しなければならないのかの注意が必要だろう。

また、アイロニーをこの文脈の中で、《皮肉》と註解していいのだろうか。この場合のアイロニーは、常識では欠損と見えるものの中に、美の可能性、普遍性を見る、いわばマイナスをプラスに読み替える反語的認識法が働いているのだから、《皮肉》では間違った理解になる。それと最初のパートのところで《ぼくはここで、逆説を弄しようとしているのではない》という文が出てくる。《逆説》、つまり、パラドックスは、時に同じように使われるアイロニーの類語だから、これとの関連が指摘されねばならない。しかし、この初めと終わりの離れたところに出てくる、この二つの語の関連を、それぞれの文の解釈を通して問うているように見えるのは、大修館版の教科書だけである。清岡的な語法の中では、アイロニーの概念は意味的にパラドックスと重なる。

ここで清岡はアイロニーをものや世界の美的認識法として、使っているわけだが、これはドイツロマン派の（ロマン的イロニー）の考え方に近い。日本では清岡に影響を与えている萩原朔太郎の詩観がこれを反映している。朔太郎は『詩の原理』（一九二八年）の中で、《故に詩的精神の本質は、第一に先ず「非所有へのおこがれ」であり、或る主観上の意欲が掲げる、夢の探求であることが解るだろう。》（かく空想や連想の自由を有して、主観の夢を呼び起こすすべてのものは、本質に於て皆「詩」と考へられる。》と述べている。清岡のこのエッセイにも似通った表現がある。むしろ、ここではこれの是非を問うているのではない。清岡の反語的認識法の出自を尋ねているだけである。

わたしは語句の意味を調べるといって、基礎作業について書いてきたのだが、語句を孤立的ではなく、全体の意味、作者の思想との関連で註釈しようとする、おのずから本文の読解の中にも踏み込まざるをえなくなる。

#### 四 本文の解読作業、モチーフ、レトリック、テーマ

さて、本文を読み解くには、段落、パートの区分、そして、それらの要約が必要だろう。しかし、この作業は高校生の読みのレベルでも容易にできる教材である。なぜなら、このエッセイは比較的短文である上に、一行あきを二箇所作って、全体が三つのパートでできている、そのことは誰の眼にも明らかだからであ

る。また、三つのパートは、それぞれ三、二、二の合計七つの段落に分けられる。ただ、それぞれの内容の把握は、読解の作業と合わせてしなければ意味がない。形式的な文の段落分けは簡単でも、高校生にとって、この文の読解は容易ではないはずである。

作者のモティーフは、言うまでもなく《ミロのヴィーナス》を實際に見たこと、そして、ヴィーナスが両腕を失っているところに限りない魅惑を感じ、その秘密を知りたいと思ったことにあるだろう。しかし、そう思うことは一つの美的なものについての見方であり、美を感受する能力が清岡の中に潜んでいたことになる。その隠されたモティーフについては、読む側の想像に任せられている。

ところで、《ミロのヴィーナス》とは、何を指しているのか。その点については、本文でも説明されているが、どの教科書も本文下段に丁寧な註を入れている。エーゲ海のメロス島(ミロ島)で、一八二〇年に発見された古代ギリシアの大大理石像ヴィーナスのことである。フランス人に買い取られて、パリのルーヴル美術館に運ばれ、現在はそこに展示されている。わたしもそれをルーヴルで見たが、わたしが驚いたのは、その意外な大きさと、顔や体型から、なかば美しい青年のイメージを受けたことであつた。もう少し詳しく言えば、そのヴィーナス像は上半身が裸で胸に膨らみや乳房があるにもかかわらず、エロスの要素がなく、中性的、あるいは両性具有的な印象が強かつた。むしろこれは単なる

わたしの主観に過ぎないが、清岡のように両腕の欠如というところに、あまり惹かれなかつたのも確かである。しかし、清岡はこの文章をいきなりテーマの中心に触れるところから始めている。

ミロのヴィーナスを眺めながら、彼女がこんなにも魅惑的であるためには、両腕を失っていなければならなかつたのだと、ぼくはふしぎな思いにとらわれたことがある。つまり、そこには、美術作品の運命という制作者のあずかり知らぬ何ものかも、微妙な協力をしているように思われてならなかつたのである。

言うまでもなく、ギリシア神話において、ヴィーナスは美と愛の女神である。ここで清岡が立てている問いは、ヴィーナスが美の理想像として人々を魅惑するためには、両腕が欠損していなければならなかつた。それはいったいどういうことなのか、ということである。引用部分に《ふしぎな思い》ということばが出てくるが、この《ふしぎ》は文章全体を通して三回出てくるキー・ワードである。先の《楽しい旅行》という、詩的随想のスタイルは、この《ふしぎ》を解くという思考の、あるいは幻想の旅のことにはかならないだろう。なぜ、完全や理想であるためには、欠如でなければならぬのか、そこにはヴィーナスを製作した人と関係のない、《美術作品の運命》ということが関与しているの

ではないのか、というように二つの問いが重ねられている。《美術作品の運命》ということばも、再度、文末に出てくるが、各教科書が学習の手引きや要点として設けている設問では、あまり注意されていない。

物事や対象が常識とは別の姿、不思議な意外性として現れてくるためには、それを見る人がそれを見分ける眼、つまり、驚く力を持つていなければならない。世に言ういわゆる猫に小判、豚に真珠では、物はそれ特有の価値を表すことがない。この不思議と向き合うことが詩的態度であり、驚くことのできる感性が詩を生み出すのである。この文章が詩的随想である理由だろう。しかも、この文章が《気まま》な《楽しい旅行》であるのは、次の段落のこんな表現に示されている。

その時彼女は、その両腕を、故郷であるギリシアの海か陸のどこか、いわば生臭い秘密の場所にうまく忘れてきたのであった。いやもつと的確に言うならば、彼女はその両腕を、自分の美しさのために、無意識的に隠してきたのであった。

この箇所の表現性に注意をしている教科書はなかったが、しかし、どんな文章でも、それを読ませるのは、語り口の魅力をおいてほかにはないはずである。ここでヴィーナスは、どこかミロ島の生きた漁師の娘のように扱われている。修辞的な用語で言え

ば、擬人法ということになるが、しかし、《彼女》を主格において《自分の美しさのために》どこかに両腕を忘れてきたとか、隠してきたとか言うユーモラスな表現に、作者は先の朔太郎の《非所有のあこがれ》という詩的な幻想を楽しんでいる。それに気づかなければ、この文章は単に風変りな美術論ということになるだけで、その文体上の特徴はうかがわがってこない。

もとより、ヴィーナスが両腕を失ったことは、《彼女》の意志でもなければ、制作者の意図でもない。何らかの偶然的事故によって、そうなったのである。だから作者は、《彼女》の両腕の欠落によってこそ可能になった詩的イメージ、《非所有へのあこがれ》を、《特殊から普遍への巧まざる跳躍》とか、《部分的な具象の放棄による、ある全体性への偶然的肉薄》というように、批評の文体で言い直すことになる。いくつかの教科書の設問が、この批評の用語の部分の説明を求めていることは納得できるが、それは単に解釈で済まされることではないだろう。作者が最初のパートの三段落目で述べている、《失われた両腕はあるとらえがたい神秘的な雰囲気、いわば生命の多様な可能性の夢を深々とたえている》という、詩的な夢想の問題だからである。

このことは、たとえばミロのヴィーナスが、もし両腕をつけていたら、それは普遍的な美に背いているか、全体性が感じられないか、と反問してみればいいだろう。むろん、一義的に答えは出せないが、現実の両腕を欠いた像が、清岡の言うように、《高雅

と豊満の驚くべき合致を示し》、《均整の魔》がそこにあるとするなら、両腕の備わっていたはずの元の像も、やはり、その延長にある美の典型を表現している、と考えるのが自然である。しかし、その自然の考えの中では、《多様な可能性の夢》は死なざるを得ない。

第二のパートに入ると、《ミロのヴィーナス》の両腕の復元案をめぐる、清岡の考えが展開される。当然、前のパートを受けて、すべての両腕の復元案の試みは、《興ざめたもの、滑稽でグロテスクなもの》として否定される。なぜなら、ヴィーナスの両腕のあるなしは《表現における量の変化ではなくて、質の変化である》と捉えられているからだ。そこでの《有》は、どんなにすばらしい《有》であっても、《無》がはらんでいる《夢》と置き換えができない。こうしてすでに試みられている幾つかの復元案には、べもなく否定される。しかし、その誇張した否定の身振りにもかかわらず、《すべての復元のための試みは正当であり、ぼくの困惑はかってなものだろう》という、留保がおかれていることにも注意が払われねばならない。そこに作者自身が自分の主観性を自覚している、この詩的随想の文体上の特色が見られるからである。

第三のパートでは《なぜ、失われたものが両腕でなければならぬのか》という問いが扱われる。《手》や《腕》のもつ《人間存在における象徴的な意味》が語られるが、ここの考えがいくら

か鮮明さに欠けるのは、それが世界、他人、自己との交渉手段とか、《手》の延長に機械があるとか述べられているだけだからだろう。しかし、もっとはっきり言えば、そのことは《手》が持っている道具性、用具性ということではないか。ものが美的なオブジェとして現れるためには、それが持つ道具的連関が切断されなければならぬ。この考えに普遍性があるとすれば、ミロの失われた両腕は、芸術の運命を象徴している、と言えるだろう。

しかし、もし《ミロのヴィーナス》が、両腕をつけた原形の状態で見えさせていたら、わたしたちはそこにどんな美も夢の可能性も見ないだろうか。わたしはそうは思わない。ただそれは性質の違う美や夢の可能性を見ることになるだろう。実際、わたしはルーブル美術館で《ミロのヴィーナス》をみながら、先にも少し触れたように、まったく別の夢想にふけていた。確かに《ミロのヴィーナス》の両腕を復元する必要はないだろう。しかし、その状態に美の絶対性を見ることも、《ロマン的イロニー》による美的世界の認識という、一つの主観性の選択に過ぎない、と思ふ。

清岡のエッセイは最初から述べているように、あくまで《ミロのヴィーナス》をめぐる《気ままな》《楽しい旅行》であり、詩的な随想である。真と偽を見極めたり、善と悪が争ったりするような論文ではない。そのことは先にも触れたように、文章の随所で作者自身が注意している。したがって、このエッセイにおける



清岡の考えに対しては、むしろ、文脈のできるだけ正確な理解を前提にした上で、生徒たちに自由な意見を闘わせたほうがいい、と思う。

## 五 文脈・文意を理解するための十六の設問(手引き)

当然のことながら、あくまでこれは仮の試みである。各教科書が設定している学習の手引き等を参考にしながら、文章の展開にしたがって、順次、生徒に問いかけられるように考えてみた。むしろ、問いの内容が重なるものが多くあるが、その中からふさわしい問いを選択できるように、あえて重複を避けていない。

- ① 本文中に《ふしぎ》ということばが、三回使われています。それはどういう文章の特徴を示していますか。
- ② 《美術作品の運命》ということばが、最初と最後に出ていますが、作者は何を運命と考えているのでしょうか。
- ③ 《その時彼女は、その両腕を、故郷である……(省略)……無意識的に隠してきたのであった》までの文章は、他のところと表現の仕方が違っています。どう違っているのかを説明しなさい。
- ④ 《特殊から普遍への巧まざる跳躍》《部分的な具象の放棄による、ある全体性への偶然の肉迫》とは具体的にどういう意味ですか。本文に即して考えなさい。
- ⑤ 《ぼくはここで、逆説を弄しようとしているのではない》

と書かれていますか、それは何を意味していますか。また、作者はなぜそのように断ったのですか。

- ⑥ 《ミロのヴィーナス》について、《高雅と豊満の驚くべき合致》とは具体的に何を表現しているのですか。
- ⑦ 《生命の多様な可能性の夢を深々とたたえている》とは、どういうことですか。
- ⑧ 《微妙な全体性への羽ばたき》とは、何を意味していますか。
- ⑨ ヴィーナスの両腕の復元案について、作者は《すべての復元のための試みは正当》である、と述べながらも、なぜ、全面的に否認するのですか。
- ⑩ 《表現における量の変化ではなくて、質の変化である》ということを、文脈に即して具体的に説明しなさい。
- ⑪ 《おびただしい夢をはらんでいる無》を、次の行の《有》と対照させて、その意味を説明しなさい。
- ⑫ なぜ、作者は《芸術というものの名において》、たとえ《真の原形が発見され》ても、《その真の原形を否認したい》と思うのですか。
- ⑬ 作者にとって、《失われているものが、両腕以外の何ものかであってはならない》のはなぜですか。
- ⑭ 《手というものの、人間存在における象徴的な意味》について説明しなさい。

- ⑮ 《ふしぎなアイロニーを呈示する》を最初のパートに出してきた《逆説を弄しようとしている》ということばと、対照させて説明しなさい。
- ⑯ 文末の《ほかならぬその欠落によって、逆に、可能なあらゆる手への夢を奏でるのである》を考えの中心において、この文章が全体において語っていることをまとめて下さい。

## 六 学習の発展

- ① このエッセイを参考にして、自分の好きな芸術作品についての疑問や感想を、自由に楽しいエッセイにまとめてみよう。
- ② 『手の変幻』に収録されている清岡卓行の詩「思惟の指半跏思惟像（広隆寺）」と比較して感想を述べてみよう。  
(この作品についてはコピーして、高大連携国語教育研究会の席上でお渡しした。)
- ③ エッセイ、詩歌、小説などの表現・文体の区別を考えてみよう。

以上、久し振り（四十年振り）に、高等学校の国語教育の現場に立ち返った心構えで、教材に取り組んでみた。高校の先生方の忌憚のないご批判を賜れば幸いである。